

(算数科)

「できた！もっとやりたい！どの子も笑顔で輝くユニバーサルデザインの授業をめざして」

大阪市立野里小学校 塩月直子 佐々木章子 原田清臣

1. 研究主題設定の理由

本校では、これまで各教科において問題解決型学習の実践研究を進めてきた。

実践研究を進めていく中で、学習内容を良く理解できている子どもが積極的に発表を行う一方で、自分の考えに自信の持てない子どもは、ただ友だちの発表を聞くことに終始している実態がみえてきた。さらに、指導者も一部の子どもの発表をもとに授業を展開していくこともあり、子どもたち全員が自分の考えを持ち、周囲に伝え合い、共有しあうことのないまま、学習を終えてしまっているのではないかという課題に気づいた。

問題場面をイメージすることが苦手な子どもや、一度に多くの情報を処理することが苦手な子ども、集中して物事を考えることが苦手な子どもなど、学習を進めていく上で支援を必要としている子どもがたくさんいる。

その支援を必要としている子どもたちに焦点をあて、適切な指導方法を研究していくことで、子ども全員が楽しく「わかる・できる」ようになる授業をめざせるのではないかと考えた。

そして個の違いを互いに認め合えるそんな学級集団を作りながら進める、授業のユニバーサルデザインを研究することとし、「できた！もっとやりたい！どの子も笑顔で輝くユニバーサルデザインの授業をめざして」と研究主題を設定することにした。

2. 研究の視点

研究主題にせまるために研究の視点を以下のように設定した。

(1) 学習環境のユニバーサル化

子どもたちが落ち着いて学習に臨むための教室環境の整備を行った。

- ・教室の前面は、ハンドサインの掲示物のみとし、環境刺激の量を極力減らした。
- ・一日の学習の予定を確認できるよう黒板に常掲した。また、単元の流れも掲示し、随時確認しながら授業を進めた。
- ・靴箱や掃除道具入れなど、収納の仕方と場所がわかるように、写真や図で明示した。
- ・学級集団づくりに活かすために学習のルール（声のものさし・学級の決まり・ハンドサインなど）を常掲した。 など

(2) 授業のユニバーサル化

○「視覚化」について

子どもたちの思考をゆさぶるための絵や図を最大限活用することにした。聞くだけの時間を極力減らして、子どもたちが見る必要性を感じながら、活動できるよう授業の進め方を工夫した。

効果を高めるために視聴覚教材の活用、拡大提示など、情報伝達の工夫も行った。

○「焦点化」について

授業の中で教えたこと、考えさせたいことなどのポイントをしばって指導を

するようにした。そのために発問は簡潔かつ具体的になるよう工夫した。

授業を焦点化し、子どもたちが目当てを持ち、集中して活動ができよう提示するポイントは1つないし2つに絞った。

○「共有化」について

一人の子どもの見方・考え方のよさを全員に広げて、共有しあうために、全員の子どもが自分の見方・考え方を発表できるよう工夫した。挙手で自発的に発表するだけでなく、タブレットPCや発表ボードなど一人一人が発表しやすい方法を選べるよう工夫した。

3、研究の成果と課題

(1)研究の成果

①「教室・学習環境のユニバーサル化」について

子どもたちは学校生活や授業に見通しが持てるようになり、どの子も学習に自発的に、また安心して取り組めるようになってきた。また、私語が減り、学習に落ち着いて取り組めることが多くなるなどの変容が見られた。

②「授業のユニバーサル化」(共有化)について

○学習の解決方法をパターン化し、確認しながらすすめることで自分の考えをすすんで書いたり発表したりすることができた。

○考えを練り上げる段階では、ペアで話し合ったりグループで考えたりした。また、同じ考え同士の小集団で集まることで積極的に意見交流ができた。同じ考え方が集うことによって互いの意見を容易に共有し合うことができた。

○視聴覚機器を使うことでさまざまなことを共有することができた。ノートの使い方も簡易OHCを使って視覚化をはかると同時に全体に確認しながらすすめることで、自分の「わかりやすいノート作り」にも役立てることができた。問題の提示場面でも「何が問題なのか」「何がわかっていることか」を視聴覚機器でわかりやすく示すことで全体に共有することができた。また、タブレットPCを使い、自分やグループの考えをわかりやすく発表することができた。DVDや動画、楽譜作成ソフトなどを使って指導をすすめることで、実践を伴う学習について一度に全員に確認・共有することができた。

(2) 今後の課題

意見交流の場の設定は、発達段階に応じて工夫する必要がある。

低学年では、話型は提示したり練習したりしているので伝え合うことはできても、似ている点や相違点を見つけるまでには至っていない。

高学年では、ペアやグループでの考えの練り上げでの役割がいつも決まっていて話しやすい雰囲気とまではいかないこともあった。

今後、ICT機器を使った授業の工夫がますます必要とされる。研修を重ね、子どもたちに有効な形で提示できるようにする。

どの場面でどの機器を活用した指導が効果的なのか、実践を積み重ねながら検証していきたい。

また、今後はICT機器をいつでも簡単に誰もが使いこなしていけるために研修を充実させる。